

# 歴史を知って、忘れないでほしい

——映画『満蒙開拓団』を見て——

畢 楊

この映画を見て、深い感動を覚えた。しかし、開拓民の悲劇に同情したのか、それとも、戦争が世界の人々にもたらした災害に心を痛めたのか、自分でもはっきり分からなかった。開拓団のことをよく知らなかった私はショックを受けた。

それで、大学一年生のことを思い出した。高校時代の友達に日本語を勉強していると話したら、「何で日本人の言葉なんか勉強するの。中国で侵略戦争を起こした国だよ。日本がどんな災難をもたらしてきたものか」と変な顔をして言われた。そんな表情をされたら何を言えばいいかわからなくなってしまった。実は日本語学科に入ることは家族もあまり賛成してくれなかった。特に老齢の親戚は全然理解できないようだった。その一方で、「日本語？ かつこいいね。私も勉強したいわ」と言われたこともたまにある。日本のことだったら何でも好きで、とても日本に憧れている人もいる。

しかし、両方とも極端だと言える。中国人が日本人を恨んでいるのは日本軍が中国人にさんざんなことをしたからだ。けれども、この映画を見て、日本国民も日本軍が起こした戦争の被害者だということがわかるようになった。日本政府は満州に行け、開拓に行けと国民に勧めた。国民は国のため、天皇陛下のためだと思って、中国に来たのだ。日本政府と日本軍がそこで何をしていたかいっさい知らなかったそう。一般の国民は事実を教えられなかったらしい。だから、日本人は敗戦後、逃避行の最中に中国人に襲撃されてびっくりしたわけだ。豊かな生活が送れると聞いて来たのに、こんなひどい目にあうなんて、開拓民たちは夢にも思わなかったでしょう。騙された思いがしたでしょう。

戦争が終わって、長い月日が経った。残留婦人と孤児たちの多くは帰国することができた。しかし、帰国して国に提訴しても政府はあまり責任を持たないそう。私は非常に驚いた。その原因はよくわからないが、日本の国民も軍国主義、あるいは戦争の被害者であったことだけはしみじみ感じられた。だから、何ですべての日本人を恨まないといけないのか、と思うようになった。お互いに戦争のせいで家族が亡くなった不幸な者同士なのだ。

実は西安交通大学には、日本人の留学生が少なからずいる。若い人からお年寄りまでさまざまな人たちだ。皆まじめで、勤勉なようだ。私の知っているあるおじいさんはとても中国語が好きで、毎朝大学の隣にある興慶公園で朗読しているそう。相互学習のときも、とてもやさしくていつも親切に日本語を教えてくれた。このような人がまた他にもたくさんいると信じている。

中国人はもっと理性を保ったほうが良いと思う。愛国心は皆が持っているものだが、もっと理性的になったほうがよいのではないか。かつて、日本人開拓民の逃避行を助けた中国人がいた。そのおかげで、今なお生きている日本人もいるのだ。周恩来総理が言った「祖国を見ることなく逝った開拓民たちも日本軍国主義の犠牲者である」という言葉に、私は深く感動を覚えた。そして、周総理は日本人墓地の建立を許可したのだ。これこそ中国人にとって誇るべきことでしょう。中国人に養父母になってもらい、生活を支えてもらい、最後に日本に帰ることができた人たちが映画の中で出てきた。善良さは国籍にかかわらず、人間の本能的な感情、やさしさなのだと感じた。彼らはそこで一生の絆を結んだことでしょう。

実は、同年代の中国人に聞いても、日本人に聞いても、満蒙開拓団のことを知っている人はほとんどいない。今の中国の学生には興味がないのか、歴史についてよく知らない人が少なからずいると思う。自分も詳しいことは知らない。このことは、日本に非常に憧れるという現象を生んだ理由の一つだと言える。その一方で、日中の歴史をよく知っている人の大部分、特に中高年世代はひたすら恨みと悲しみだけを抱いているのではないか。

私は歴史を知ってほしい、忘れないでほしいと思う。ただ、忘れないのは恨みではなく、歴史自体だと思う。ひたすら恨むことになれば、何にもならないだろう。中国と日本はお互いに学びあうことがたくさんあって、グローバル化が進むにつれて、これからの協力はいつそう深くなるのが望ましいことではないかと考えている。両国国民同士は、お互いに被害者だったのだから、もっと理性的で、寛大に接し合い、この貴重な平和を大切にしていけるのが一番いいことなのではないだろうか。

(ひつ・よう：湖北省武漢市郊外で生まれ、現在、西安交通大学日本語科4年生。中国全土で行われた日本語スピーチコンテストの西北地区で準優勝。7月12日より1週間、日中科学技術文化センターの招待で来日中、岩波ホールで『嗚呼 満蒙開拓団を観る』)

#### 《写真説明》

右上写真の左側が社団法人日中科学技術文化センター会長の野沢太三会長、右が畢楊さん。その日会長に挨拶に向かう時、野沢会長が元法務大臣だということで彼女はやや緊張したようだった。大類が会長のデジカメで記念写真を撮り終わると、野沢会長から「大類さんもツーショットを！」と言われと並んだ。(下写真)

すると会長曰く「大類さん、くっつき過ぎるよ」と言う。どういうわけか大類は、女性と並んで写真を撮られると自然に女性の方に傾むく癖が出るようだ。

なお、畢楊さんは来年(2010年)4月、広島県立大学への留学が決まった。

